

東京 IPO 特別コラム

2021年1月29日 Vol.172

警戒感台頭、久々の調整で月末を迎えた株式相場

ようやくコロナ感染者数がピークから減少してきたとホッとする一方で株式相場はようやく調整の動き。1月20日にバイデン新大統領が打ち出した異例の数の大統領令を警戒したのか米国株もやや調整含みとなりつつある中で、日経平均に代表される日本株は1月14日の高値2万8979円を抜けないまま久々に月末は2万8000円割れを演じています。具体的な波乱材料は後講釈でいろいろ出てくるとして、最大の懸念材料はこの相場がバブルなのではないかということ。強気が支配する上げ相場の中でかき消されがちな警戒感がようやく投資家心理に影響を与えようとしています。PERは26倍以上、PBR1.3倍水準となり好需給で上げてきた指数に一旦の調整場面を提供することになりますが、そうした調整場面こそ、ここからはまた皆様待望のIPO銘柄に目が向くものと期待されます。

既に2月のIPOは7銘柄（昨年2月は3銘柄）の上場承認がなされ東京IPOサイトでも閲覧が可能となっており、皆様もその内容を吟味されておられるのではないのでしょうか。その中でも今年初となるIPO銘柄は半導体レーザの開発・製造会社、QDレーザ(6613)です。同社は川崎市に本社を置く研究開発型ベンチャー企業。今期で設立15期目となりますが研究開発型企業に特有の赤字先行が特徴として見られます。富士通の量子ドットレーザ（半導体レーザの活性層（発光部）に半導体のナノサイズの微結晶である量子ドットを使用した温度安定性に優れたレーザ）技術に基づく光デバイス開発のベンチャー企業（富士通と三井物産のVC資金がベース）として現・菅原社長（1958年11月27日生まれ）が設立した企業です。設立後に東大と量子ドットの結晶成長技術に関する研究で共同研究契約締結しており東大発ベンチャー企業としてのイメージもあります。また、2020年に、眼鏡ショップ・Zoff（ゾフ）を運営するインターメスティックと業務提携。145万人と言われる視覚に障がいのある患者向けの視覚支援機器の開発販売にも注力。5G時代の到来で成長が期待されるシリコンフォトンクス企業として評価を高める可能性があるほか、網膜走査レーザアイウェアを医療機器として展開することで成長を目指しています。発行価格は340円。上場時発行済み株式数は3458万4180株で上場に際して公募945万1800株（金額32億円）、売出410万7600株（金額14億円）を予定。上場時の時価総額は118億円で、発行済み株式数がやや多いほかVC出資なども多いため初値は穏健なスタートとなる可能性があります。まだ今3月期の営業利益は7億円近い赤字が見込まれますが、赤字幅は前期の12億円から大幅に縮小する見通し。一方、売上はLD（半導体レーザ）が製品の受託開発を中心に今期34%の成長が見込まれており、業績の拡大が本格化しつつあるという印象です。全体相場がやや調整含みの中で始まる令和3年のIPO。引き続き皆様とともに見守って参りたいと思います。

（東京IPOコラムニスト 松尾範久）